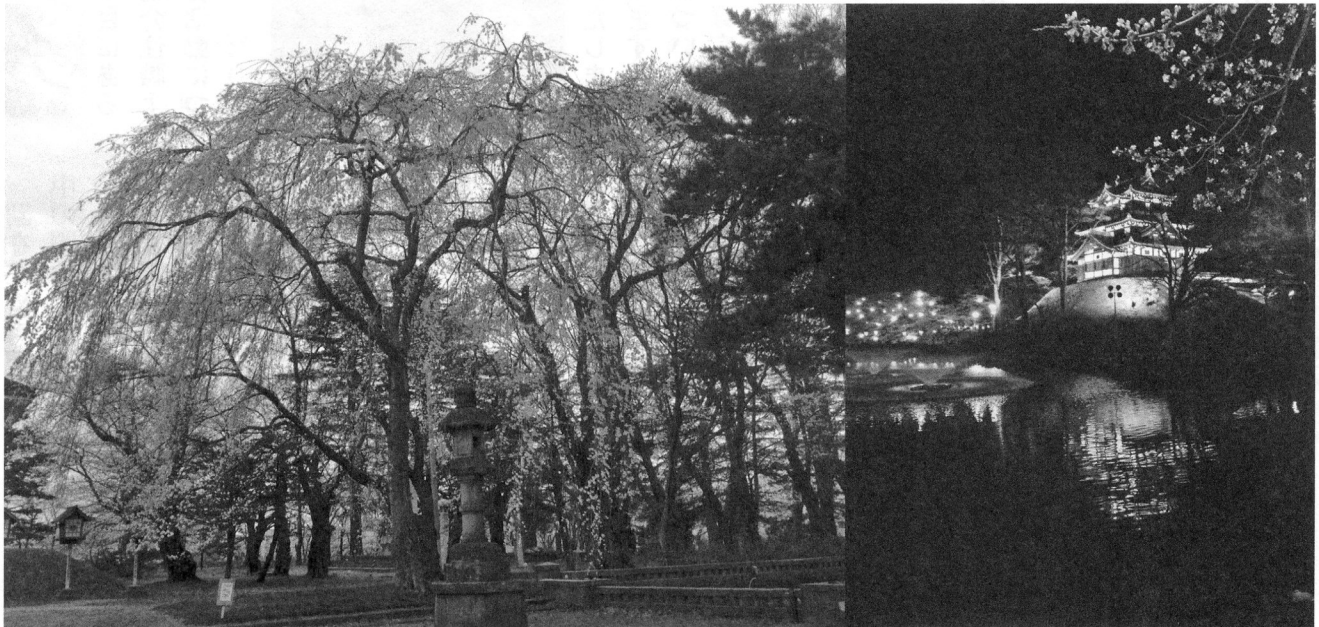


<p>高田教区宗祖親鸞聖人 七百五十回御遠忌テーマ・ 教区教化テーマ</p>	<p>高田教区報</p>	<p>響流</p>	<p>第 127 号</p>	<p>発行所 上越市寺町2丁目24-4 真宗大谷派 高田教務所 編集 響流編集委員会 発行 森田成美 印刷 サクラ印刷(株)</p>
<p>私はどこで生きているのか ～たずねよう 真宗の教えに～</p>				



高田城公園の桜

「生かされている」といふこと

第八組入光寺 龍池 修

仏教の、特に真宗のお話の中でよく「生かされて」という言葉を耳にします。私が以前勤めていた高校で生徒たちにこういう言葉を伝えたところ、かれらの多くは「生かされている」というのは体中にチューブをさしてまれて延命治療を受けている状態をいった言葉であると理解してしまいました。何の説明も付け加えなければ、無理やり生かされているという意味に伝わるんだなと驚いた経験があります。多くの生徒はわたしたちは自分の力で「生きている」と思っていました。なにしろ今までそんなこと考えたこともないんですから無理ありません。私たちの多くもまた、生かされているということについてあまり考えずに過ごしているのではないのでしょうか。

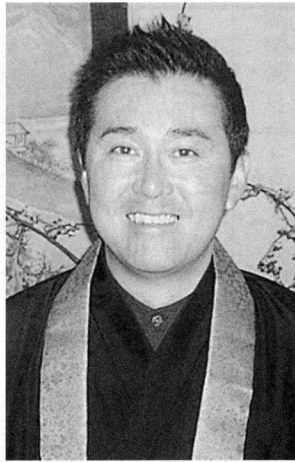
そこで私たちが生きているいのちについて考えてみますと、まず、私が生きるために必要な水や空気や食べ物や自分で作ったものですか。私の衣食住の生活を支えているもので自分で作ったものはどれだけあるでしょう。ほとんどが私以外の人や自然が作り出したものです。ということは、私以外の人や物に支えられて私のいのちはあります。さらに私が生きていくために両親をはじめ多くの人の励ましや応援があつて今の私があるのです。私が今あるのは限らない人や物のおかげだといえます。

また、私という人間の体を支えている心臓や内臓といった臓器は私が休んでいる間も休むことなくはたらいています。心臓は体の隅々まで血液を送り出し、食べたものは夜、私たちが眠っている間に体の中で必要な栄養分を摂り、残ったものは体の外へ不要物として排泄されます。さらに私の体をつくっている五十兆とも六十兆ともいわれる細胞すべてが私を生かそう生かそうとしています。こうしたはたらきは無条件であり、すべて全自動でおこなわれているのです。私の意志とは関係なしです。

こうして見てくると、「私はさまざまのおかげさまによって生かされてここに存在しているのだ」ということが言えるのではないのでしょうか。私を生かすために無限といってもいいほどの有形無形の支える力があるのだと思います。それをご縁ともいいます。ご縁によって生かされて私はあるのだということです。そのことに気づき、私自身の人生を丁寧にして大事に生きていきたいと思います。

寺院クローズアップ

今回は、上越市寺町三丁目にある真宗寺を訪問して、淀野社介住職よりお寺の縁起、由来や教化活動についてお聞きいたしました。



◆お忙しいところ伺いました。また、よろしく願います。先ず真宗寺の創建と開基についてお訊ねしたいと思います。

真宗寺の寺伝によれば、平安末期の人物、藤原光隆卿の弟が、真宗寺の開基住職になります。この藤原光隆卿という方は、京都の「淀」に縁があり、通称淀ノ中納言とよばれていたそうです。この淀ノ中納言は、『平家物語』に登場する猫間中納言でもあります。また、淀ノ中納言の次男は、小倉百人一首の九十八番目「風そよぐ ならの小川の 夕暮れは みそぎぞ夏の しるしなりける」の歌人、従二位(藤原)家隆になります。

話を進めますと、淀ノ中納言は越中の国司となります。信仰心の厚かった淀ノ中納言は越中新川郡荻生村の真言宗の慈賢僧正の高徳を敬仰し、当時十一歳の幼弟・岩千代丸を慈賢のもとで出家、得度させました。岩千代丸は、「慈観」の名を賜り、後に師の後継として真言宗の寺院の住職となりました。

時は流れて、承元元(一一〇七)年、越後国府の配所へ向かわれる途中の親鸞聖人が、豪雨出水のため、黒部川の渡しで足止めされて、慈観の真言宗寺院に四日間逗留されました。この間に親鸞聖人の教えに感服し、聖人の教えに帰依し、法名「一乗」と寺号「真宗寺」を賜りました。これをもって真宗寺の開基とします。

そして、真宗寺は越前国坂井郡金津(吉崎)に移り、蓮如上人の北陸教化に協力して、「金津山」の山号を賜りました。蓮如上人、顕如上人、教如上人との結びつきは極めて深く、教如上人を越中のご門徒と共に城端の善徳寺にかくまったことで、大変信頼も厚かったようです。

本願寺の東西分派の折、真宗寺住職・賢波坊は、教如上人の恩誼を重

んじて東本願寺に属しました。しかし、東西の抗争で越後福島(現直江津)の地に移り、その後、高田城下町の寺町に移転し、現在に至っております。

◆ところで寺町は寺院が多いですが、宗派の分布はどうですか。

寺町は、六宗派、六十六カ寺あります。その内、浄土真宗は、大谷派十七カ寺、本願寺派六カ寺、仏光寺派三カ寺、浄興寺派十カ寺で、合わせて三十六カ寺が軒を連ね、全体の半数以上におよびます。また、寺町以外にも高田城下の街道筋には浄土真宗寺院が多く点在しており、そのため高田別院は重要な使命をもっています。

◆ところで、高田別院(創建当時は高田掛所)の設立について、真宗寺の住職、良由さんが活躍され、ご苦労されていますが、その辺りの歴史をお聞かせください。

江戸時代の初期、すなわち越後中將家松平光長の時代寛文大地震後の復興で、高田城下は徳川家四家格にふさわしい発展を遂げて、城下の寺院、特に浄土宗と真宗の本誓寺、浄興寺は大いに栄えました。

本誓寺、浄興寺は、中本山であり、東本願寺の指令を末寺に伝達したり、末寺からの願いや届けを本山に取次ぎ、各地の真宗寺院へ名号や仏像の伝達をする機能をもっていました。そのため、諸々の願い事は両寺の添え状を付けなかつたら役所に受理されないなど、相当な権威をもっていたようです。

そのような中で、高田に掛所をつくる動きが出てきます。その運動の先頭に立ったのが、当山真宗寺の良由でありました。

◆高田掛所の設立は、反対や抵抗もあり困難を極めたと聞きます。その辺りの事情をお聞かせください。高田掛所設立は、中本山の本誓寺、浄興寺にしてみれば、今の権威の失墜につながりかねませんので、両寺の猛反対で難航したようです。

東本願寺では、全国各地へ掛所を設けて末寺との関係を深めていきました。この地域では、新井掛所がありました。高田城下には寺院が多く集まっており、掛所をつくる末寺の統括と教線の拡張を図るのは当然なことと考えられました。しかし、本山にはそれができませんでした。

その理由は、東本願寺内における本誓寺、浄興寺の勢力が、余りにも大き過ぎたためといわれています。

◆真宗寺の良由は、掛所設立の発起人としてどのような行動をとったのでしょうか。

当山第二十四世住職・良由は元禄十三（一七〇〇）年の生まれであります。掛所設立運動が始まったのは良由二十二歳のときでした。

本誓寺、浄興寺の圧力から逃れるため、享保七（一七二二）年五月に、頸城一円の大谷派寺院は、真宗寺の良由を発起人として、高田藩の奉行所に口上書「高田御坊御起立ノ儀」を提出しました。

奉行所は「近くの新井に掛所があるではないか」といつて、許可する気配はありませんでした。

五年後の享保十二（一七二七）年、門徒たちは高田掛所建立の願いを大挙上洛して本山に訴えようとしたが、奉行所はそれを禁じました。各寺院は「西へ転派する」と怒りだしましたが、良由と父の良寿は一同を何とか説得したそうです。

そこで翌十三年、良由は単身上京して本山の法主・眞如上人に掛所設置の必要性を訴えました。法主は

『茶地金襴御垢付袈裟』を良由に与え、「よしなに」と言われたそうです。

これは、本誓寺と浄興寺に対しての遠慮からではないかと思われませんが、

『茶地金襴御垢付袈裟』、すなわち法主が今身に付けていた茶地金襴の袈裟を良由の目の前で脱ぎ、そのまま良由に与えたということは、法主の本当の気持ちは良由と同じであるということであることを伝えたかったのではないかと思うのです。

当時、法主と直接見え、かつ、御垢付の袈裟を賜うことはなかなかいことだったそうです。

そこで良由は、法主のお立場やお気持ちを察し、今度は、江戸の寺社奉行所に陳情の相手を移して行うことにしました。

そのとき、掛所設立運動の後押しをしてくれたのが、幕閣の丹波和泉守でした。丹波和泉守の根回しで、幕府寺社奉行小出信濃守の登城をねらって直訴しました。当時、順序を経ない訴えは、越訴といって重罪に処せられました。

◆良由は、捕えられますが、その後どのように事は展開していくのでしょうか。

良由は、直ちに捕えられ、入牢の

憂き目にあいましたが、十八日目に生まれ、三十五日目に奉行より「高田掛所、願イトオリ建立申スベク候」との申し渡しをいただくことができました。

これには、京都泉涌寺の住持、上野輪王寺宮、小出信濃守の好意があったものと思われまます。

そして、掛所の許可を得た良由は、各所に喜びの挨拶回りをしています。真宗寺門前は、市を成すほどの祝賀気分であつたそうです。

良由は掛所創建の功労者として「東本願寺内陣一家」掛所お抱え寺」として地域の寺院をまとめる社会的な地位が与えられたようです。



◆話は変わりますが、その後も真宗寺には様々な文人が訪れたようですが、どんな人が訪ねてこられたか。

真宗寺は代々、様々な方々との交流があつたようで、文人が食客になつた場合が少なくなつたようです。その一人に東條琴台がいます。琴

台は、幕末期、林子平らと伊豆七島の防衛等、国防の急務を説いて幕府の咎めを受けましたが、高田藩主・榊原政令は、その才能を高く評価し、藩校脩道館の主席教授に迎えた人物です。森鷗外撰文の顕彰碑が榊神社境内にあります。

琴台は、高田の自然を愛して「高田十二景」を漢詩に詠み、これを書いた真筆屏風が真宗寺に蔵されています。

◆淀野住職のこれからの教化活動についてお聞かせください。

良由住職の行為は、真宗寺のみならず、越後を越えて東本願寺全体に及ぼす影響があつたと思います。その行為がなぜできたのかを考えますと、真宗寺開基住職が親鸞聖人に出遇われ、真宗に出遇い、その感動から始まっていることだと感じています。その感動が、歴代の住職に受け継

がれ、歴代の門首との繋がりになり、命運を共にし、それが、真宗寺の伝統になっていきました。そして、そういう感動の伝統が、様々な方々との出会いとなり、さらに力を貸していただくこととなり、偉業が成し遂げられたのだと思うのです。ですから、良由一人の功績ではなく、真宗に出遇って感動した人々の繋がりのおかげではないかと思うのです。これを、「自信教人信」というのでしょうか。

この感動の伝統が、今の私にも受け継がれているのならば、私自身が親鸞聖人の教え、真宗に感動する人になる他に真宗寺の教化活動はないのではないのでしょうか。

前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽くさんがためのゆえなり

〔『真宗聖典』四〇一頁〕

「真宗寺」という寺号をかかげる寺の住職として、浄土の真宗に出遇い、その感動が様々な人の感動につながっていくという、まさに念仏相続になっていくのだと感じています。

ありがとうございました。

(取材 坂井・森)

内局巡回が開催される

去る、三月十八日、内局巡回が開催された。

このたびの内局巡回は、同朋会運動発足五十一年目、宗憲改正三十一年目となる本年度において、宗門の全体像を把握し、その将来像を展望することを最重要課題として受けとめ、全三十教区を対象に行われていく。

当日は、里雄康意宗務総長をはじめ、佐々木内事部長、徳永総務部次長が出向された。高田教区からは、宗議会議員、参議会議員、教区会議員、教区門徒会員、教区教化委員会幹事会員、教区坊守会役員が出席した。

まず、里雄総長から「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」厳修の御礼が述べられ、その後、宗務の現状報告、さらに宗門の現状と将来展望について、昨年実施された第七回教勢調査の調査結果等を資料としながら説明された。

休憩後、質疑の時間もたれた。質問の内容としては、真宗教化センター構想、同朋会運動、教区・組改編、帰敬式実践運動、別院問題、見真額、開教問題についてなど、終了

予定時間を大幅に超えた中、たくさん質問があり、里雄総長はそれらの質問に丁寧に答えられた。



推進員養成講座

「推進員養成講座に参加して」

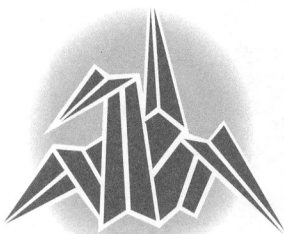
第三組浄福寺門徒 三浦 正四郎

私はご住職より推進員養成講座の参加を打診され、昨年四月から月一回の勉強に始まり今回の講座に至りました。この度参加させて頂き「帰敬式」を受式し、有難く法名を頂きました。

それまでの私は、法名は亡くなったから頂くものと思っておりましたが、仏弟子になることであって、生きて今、受式することが、本来の意味であると知りました。又受式者として参加者の皆さんの代表で誓いの辞を読ませて頂いたり、班の皆さんと宣誓文を作ったりと、いろいろと勉強させて頂きました。そして帰って以来、毎日のお勤めを欠かさず行っているところです。

これからは推進員養成講座修了者の一人として、宣誓文にありましたように、今回学んだ親鸞聖人の教えを生きる道標とし、人々との関わりを大切にし、相手の言うことを良く聞き、寺の維持と協力を努力していきます。そして、何よりも真宗門徒としての自覚を持ち、本願を信じ人生を歩んでまいります。

最後に今回の講座であまりにも知らなかった事がらを多く学びましたので、これからは少しでも多くの人に広めていけたらと思っております。



「推進員養成講座からの学び」

第三組本廣寺門徒 岩崎 逸男

法名 釋 貫綜

前期を含め八回の講座を受講し講義等を通して真宗に対する考えを深めながら互いの親交を暖めることができました。宗祖親鸞聖人の前で法名をいただき心に期するものがありました。

○朝夕のお勤め・お内仏の給仕に励む。

○仏の教えに学び、聞法に励む。

○門徒として菩提寺との関係を深める。

そして、自身に問いかけ、人(家族)・自然・動植物等に向き合いな



から、しなやかに歩んでいこうと誓いました。長く生きるも短く太く生きるも我が寿命、お内仏の前で「南無阿弥陀仏」と唱え、時には無我の境地に浸るもよし、今までの生きざまを振り返るもよし、残りの暮らしを思うもよし、やがてくるであろう終を心静かに迎えられるように！

旅立ちに「お陰様で」と、この世に別れを告げる。きつとこれでいいのでしょね。今講座にお世話くださった方々に感謝を申し上げ、「あなかしこ あなかしこ。」

「第三組第八次推進員養成講座より」

養成講座講師

第一組光徳寺 水嶋 聡

ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信するほかに別の子細なきなり。

(歎異抄『真宗聖典』六二七頁)

「ただ念仏。念仏申す者とし歩む」を念頭に始めた養成講座でしたが、私自身が参加された皆さんの姿から出直しを余儀なくされました。

約一時間の講座が終わると十人ほどの班に分かれ、今日の講座について座談会が行われます。ある日の座

談会では皆さんが終始無言で司会者が困り果てるということもあれば、またある日はどの班でも会話が進むということもありました。会話の有無は大きな問題ではないのかもしれないが、その様相の違いは一体何なのか、講座の何が違うのか、という疑問が湧いてまわりました。

講座も終盤になった頃、話の弾みで私自身の苦悩の実情に触れたことがありました。そのあとの座談会では、それぞれの苦悩の一端が見えるような、今までは雰囲気のみなる声か聞こえてきました。苦悩の身に應えるように個々の苦悩の身が語られました。そこに共に苦悩を背負う流転の身であることを教わりました。

この身は参加された方々と感応(かんおう)道交(どうこう)するたすかり難い流転の身。「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」との仰せを共にいただく流転の身でした。たすかり難いこの流転の身の自覚こそが、たすかりたいと欲(ほが)う身の事実なのだと思います。

私の話は、私自身がたすかり難い身にもかかわらず、既にたすけられた身というところから語るもののような知識を振りかざしたものでした。本当らしきものを振りかざされたら、誰だって頷き、無言



にならざるを得なくなるのだと思います。

たすかり難い身と教わり、歩み始めたこの身が何時しか、得た知識によつて既にたすけられた身と思いががり、そのことにさえ気付かない。このことを親鸞聖人は「中下の死骸(しがい)」と言われています。そして、そこを転じ生き返らせるものこそが「願海(がんかい)」といわれる弥陀の呼びかけです。

「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と改めて仰せを聞くものとして出直しです。

参加者のひろば

男女平等参画を考える会学習会

「変成男子」

第十三組榮恩寺 宮本 亮二

「変成男子」とは、女性は女性のままで仏に成れず、女性が男性と成って（変化して?）、仏に成るということを表現している。

女性が男性に成るとは、いったいどうなることなのか不明であるが、女性は男性より劣っていると考えるのであれば、明らかにそれは女性を蔑視する思想になる。

しかし、釈尊は生まれでなく行為を重視され、大乘仏教は実体化された女性や男性というものはない（無自性・空）と説いている。

また、天親菩薩の
大乘善根の界、等しくして譏嫌の
名なし、女人および根欠、二乗の
種、生ぜず」

（浄土論『真宗聖典』一三二八頁）

について、曇鸞大師は「女性やその他の差別を受けている者は成仏できないのではなく、すべての者が浄土に生まれ、名字（よびな）による差別を受けないのである」（『論註』）



と教えている。

すると、大乘仏教は女性蔑視の思想を否定しようとして変成男子を示したとも考えられる。

しかしながら、その時代がもつ表現の限界を感じないわけではない。「十方衆生」の呼びかけを、どのよう表現するのか、今、問われている。



尾神報尽為期碑研修・法要・参拝

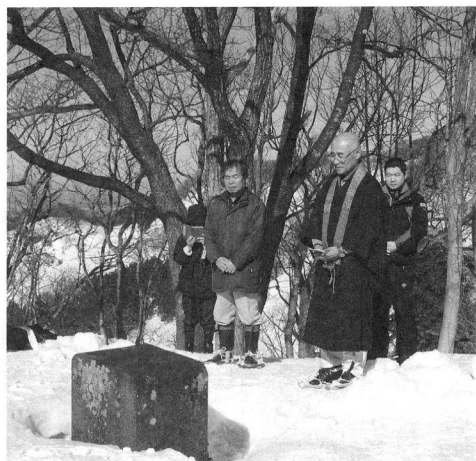
「雪中に若き命を偲ぶ」

上越市吉川区 農業研修生 嶋谷 幸彦

昨年四月に千葉県から上越市吉川区に移住してきました。私の家のちょうど北側に尾神岳が間近に見えます。その尾神岳がかつて悲しい雪崩事故があつたという話は、こちらに来てまもなくの頃から聞かされてきました。昨年は報尽碑を参ることなく雪の季節になってしまったなあと思つていた折、川谷の法西寺のご住職・松浦彰英さんに雪中参拝のお話をいただいたのです。

当日はもうこれ以上ない晴天に恵まれ、まぶしい朝日と澄み切った空の中、約二十名の一行が朝七時に坪野のスカイトピア遊ランドを出発。雪の上はカンジキがなくともラクに歩けるくらいに凍みており、遠くにはくつきりと頸城三山。当時伐り出したケヤキを海まで運搬したルート逆を辿りました。

二時間くらいで報尽碑に到着、碑は少し雪の上に頭を出していました。スコップでまわりの雪を掘り、皆でお経をあげました。死者二十七名その多くは見物に来て巻き込まれた若い命だったといえます。たかだか



百三十年前の事故でありながら、誰かが伝え残していかなければ誤認や風化もありうると知りました。先の大震災で犠牲になられた方のことも思いながら、深く静かに手を合わせました。四時間歩く間に終始私たちが楽しませてくれましたのは、塩崎直二さんのガイドでした。尾神の自然、地域の歴史、搬出ルートや事故の様子など、当時に想いを馳せることができました。

この地に暮らす者として、今回の参拝はとても大切な経験になったと思います。今回は都合が悪く参拝のみの参加となりましたが、次はぜひ前日の研修会から参加したいと思います。

センター活動報告

「たくさんさんの事を学んだ」

スキー授業」

上越市 小五 伊藤 なな

私は、このスキー授業をして、みんなと協力する事、スキーの楽しさを知ることができました。スキーのすべり方を教わって、すべるのが楽しくなって、スキー授業が終わった時は、また、スキーに行きたいという気持ちになりました。先生方には、スムーズに、友達と楽しくすべれました。



いろいろな、き画を立てて下さって、ちがう学校の人とお友達にもなれて感謝しています。ありがとうございます。

「子どもほうおんこう」

長岡市 小六 川上 笙舞

ぼくは、高田教区の子どもほうおんこうに行ってきました。

一番最初に楽しかったことは、すのことぞりで八十九mでくやしかったことです。いちばんさいしよにやって、八十九mでトップだったことです。その三人あとで九十mでこされてしまつて二回目は七十九mでだめでした。でも弟が九十九mでゆうしようにしたのでよかったです。

つぎはカレーをたべたことです。そのときカレーは少しだけだからというきもしましたがおいしかったです。来年もカレーが食べたいと思いました。三番目は、スキーでいっぱいすべったことです。さいしよはうまくすべれないと思つたけれど、だんだん調子が出てきていけると思いました。先生には、お世話になつたと思ひました。いちばん心についたことは、おおくもつを作つたことです。おおくもつは作るのがむずかしいと

思ひましたが、いがいとかなたんに作れました。

来年もまたいきたいと思ひました。よろしくお願ひします。



こんかべい 根華餅 (おくもつ) づくり

「今年も天気になあれ」 第二十五回スキー学校 併設スノーボード班」

伊那市 北原 和子

今年、初めて参加させて頂きました。参加するにあたり、普段あまり真宗に関わる機会が無いので少し戸惑ひがありました。しかし、実際に参加してみると、堅苦しい雰囲気もなく、とても楽しむことができ、また、身近に感じることができました。初めての参加で、更にスノーボー

ドも今シーズン二回目だったので不安も多かったのですが、班の方々がアドバースをして下さつたおかげで、技術も向上したように思ひますし、色々とお氣遣つてくださったので、個人的には楽しむことができました。ご迷惑をお掛けしたとは思ひますが…。

スキー班の方々とはあまり交流する機会がなく残念に思ひましたが、ビデオ鑑賞やご飯の時に少しでもお話しする機会があつたので良かったです。二泊三日のうち、全日程で同じゲレンデかと思つたのですが、違う所へ行けて楽しかったです。

今回参加したことで、これまでとは「仏教」に対する見方が変わったと思ひます。

ありがとうございます。



聞思学場

— 研究生意見発表 —

第七組速念寺 小島 英子

第二期聞思学場（二〇一一・七）
二〇一四・六）の研修生とさせていただきますから、二年目も終盤に差し掛かっている。

聞思学場の募集要項に明記されているように、対象は「若手」なのであるし、第一、私の学力では講義について行けないのではないかと、応募に当たっては、随分と悩んだ。だが、この聞思学場の他に親鸞聖人のことについて、順序立てて丁寧に学べるところはないと思ひ応募させていただきます。

私にとつては幸いと言うことになるのだが、応募者が少なかったと言うことで門戸が開かれることになった。学びの場を与えて下さり、熱心に御指導下さる先生方、親子程の年令差も受け入れてくれる、共に学ぶ研修生、いつの日も、夕方、快く送り出してくれる家族に感謝しながら、今、私は聞思学場に通わせていただいている。

ページを順を追って読み進めてい

くテキストは、『宗祖親鸞聖人』であるが、講義中、先生は、「親鸞聖人はどのようにおっしゃっておられるのだろうか。」と、直接、聖人のお言葉を確かめるため、何度も何度も『真宗聖典』を開くようにとの御指示をされる。

聖人のお言葉に触れる度、そのお言葉の一つひとつ、漢字の一字一文字が、選び尽くされたものであるということに、今更ながら驚かされる。とても講義中に、一度や二度読んで理解できるようなものではない。「親鸞聖人」について学ぶには、こればならないのだなと思ひながら、講義に臨んでいる。

聞思学場では、最初に先生の講義の後、座談形式になる。そして、毎回、講義の感想文を提出することが義務づけられている。

昨年十二月十二日の講義では、テキストの第四章「道を求めて 二一六角堂参籠—の法語二と三」について学んだ。「法語二と三」には『正像末和讃』があげられている。

『正像末和讃』は、他の二帖が「愚禿親鸞作」となっているのに対し、「愚禿善信集」となっていること、また、『正像末和讃』が著されたの

は「康元二歳」とあるから、親鸞聖人八十五歳、息子善鸞を義絶した翌年、住蓮、安樂の斬首からちようど五十年目に当たる—ということなどを学んだ。

「法語二」には、『正像末和讃』の第十四首目の和讃があげられている。

正法の時機とおもへども
底下の凡愚となれる身は
清浄真実のころなし
発菩提心いかがせん

（正像末和讃『真宗聖典』五〇一頁）
「底下の凡愚」という言葉については、井上円先生から、「菩提心すらも発せない状態」という補足説明がなされた。

比叡山は、発菩提心者の道場であったが、親鸞聖人が身をおいていたころの比叡山は、開山当時の様子はどこにもなく、すでに教えは形骸化していた。

ただその現実を、彼ら墮落者よと、批判し、軽蔑して、みずからは清浄の地を求めるということを、宗祖はしておられません。

（宗祖聖人 親鸞—生涯とその
教え（上）—一九七頁）

静かな講義室の中で、「清浄の地を求めて、修行されていた方はたくさんいたんですよ。」—井上先生が

おっしゃった。

何故、聖人は、そうされなかったのだろうか。比叡山の現実に、人間のありのままの姿を見られた聖人は、また、親鸞聖人御自身の中にも、同じ人間としての姿を見られたからではないだろうか。

真宗本廟の御真影の前で手を合わせる時、心の中を全て見透かされているような恐さを覚える。どんな繕いも、薄っぺらなものは何もかも打ち砕かれてしまうような：と同時に、妙に懐かしく、後から、後から、熱いものが込み上げてくるのを感じる。歴史上の偉大な人物、親鸞聖人としてではなく、「宗祖」としての親鸞聖人に遇いたい。「宗祖」としての親鸞聖人に遇うことを得た時、私の生き方はどのように変わっていくだろう。

三年間の学びを通して、「宗祖」としての親鸞聖人に遇いたいと願う。

『響流』編集委員会からの依頼原稿、並びに、お寄せいただいた原稿については、漢字の使い方・言いまわし等、できる限り執筆者の表現を尊重して掲載させていただいております。

愚僧のつづき

〈声明（おつとめ） 編①〉

前回までは、お内仏のお莊嚴の心を頂いてきた事ですが、今回からはそこで節を附けて勤める（しょうめいの心）を尋ねてゆきたいと思えます。普段、当たり前前に勤めている声明が我々に届くまでには、先人の深い願いとご苦労があつた事でありませう。

そもそも声明の起源は、お釈迦様御誕生以前の古代インドにバラモン教という宗教があり、その聖典に節を附けて唱えたのが始まりといわれています。そして、後に仏教がそうした声明を取り入れる事となる訳です。でも初期の仏教々団におきましては、必ずしも声明がすぐに受け入れられた訳ではなかつたんです。当時の仏弟子達にとって大切な事は、お釈迦様のみ教えを聞き、その通りに実践して悟りを得る事であり、声明等の音楽は修行の邪魔だとして、快く思わない仏弟子も少なくなくなつたといわれています。

それが大きく変わつてゆく二つの重大な出来事が起こります。その一つ目は、仏教史上最大の出来事であり、二つ目は「お釈迦様の死」。そして二

つ目は、「大乘仏教の興隆」であります。当時の仏教々団に於ては、お釈迦様のみ教えを文字に残すという習慣はなく、各自が心に刻んでいた訳です。でも、お釈迦様の死によつて、そのみ教えを正しく後世に伝え残すという事が最重要課題となつた訳なんです。お釈迦様のご遺言に、「我を見るものは法を見るものを見ろ」とい

お言葉がありませう。つまり、私の姿だけを見ている者は、本当に私と出遇つたことにならない。私の説いた教えを正しく聞き実践してゆく者は、いつでも私と出遇つてゆくことが出来るんだ。だから当時の仏弟子達は、悲しみに耐え乍ら必死になつてお釈迦様のみ教えを忘れないように、節を附けて常に

声明していかれた事でありませう。これはもう二十年以上前の話となりませうが、私、声明の先生にこんな質問をされた事があります。「お経を読むうえで、一番大切な事は何だと思ひますか」と。読経の心得として一字一拍子で読むとか、テンポを変えずに読む等と習つていた私は、ウーンと考へておりましたら、「そ

れは、一言一句間違わないで読むことです」と。声明を学ぶとは、単に勤め方のテクニクを学ぶ事ではなく、お聖教のお言葉を正しく読み伝えて、自分自身もまた聴聞してゆく姿勢を学ぶ事であると、教えられた事でありませう。（次号に続く）

（ペンネーム 維摩教信）



涅槃図
僧臘宗・海北友實らによって宝永8年(1709)に製作され、三井家によって寄進された、横4メートル、縦4メートルの大涅槃図。

天台宗 真如堂涅槃図

高田教区震災支援有志会

高田教区震災支援有志会メンバー

繁原 立

震災から早くも二年の月日が経過した。震災が起きてすぐは関心がまっただけでなかった。しかし、震災後すぐに高田では若手による有志の会が立ち上がっていた。月日が経ち毎回東北に行っている人たちの話を聞いていると私自身がテレビなどで得ている情報とはかけ離れている情報がたくさん耳に入ってきた。震災後多くの芸能人たちが復興支援金を出しているニュースを見たり炊き出しをしている映像を見た。しかし、その後は何もしていない行動に腹が立っていた。ある時に私はフツと気付かされた。私も同じことをしていないか？自分が一番嫌いなことを自分が一番やっているのではないか？

そんな折、高田で福島の子供たちの受け入れを行うという「キッズふくしま」の話が出た。無邪気な小学生がいると思ったら、陽にも焼けず、真っ白な肌をしている子供たちがいた。海に連れて行くと水を得た魚のようにしゃぐ姿を見た。話を聞けば原発の爆発により海で泳ぐことが

不可能になっていったし、外で遊ぶこともままならない生活を送っていることを話してくれた。なにも罪の無い子供たちが自分たちの遊び場を奪われていることがとても悲しくなっていた。この頃から私の中で直接現地に行つて、現状やそこに暮らしている人たちと触れ合ってみたいと感じていった。

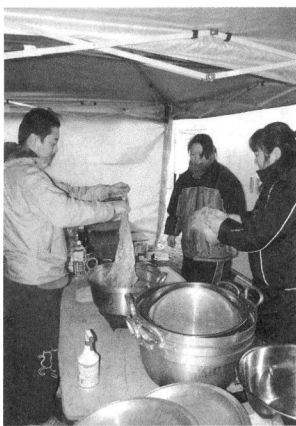


眞行寺にて

震災から八ヶ月経った十一月に初めて東北を訪れた。あちこちに瓦礫が山のように積まれて、家の土台だけが並んでいる光景などを見た。炊き出しをして夜は現地の方たちと懇親会をする。当時はいろんなところからボランティアが入っていたが、今ではほとんど来なくなっている。だから私たちも「何で毎月来て

くれるの？」と問われた。活動を通して寄磯の人達と仲良くさせて頂いて、毎月一回だけどこかに生きている人達に会いたいから行く。月一の僕たちの訪問や炊き出しを楽しみに待っていてくれる人達がいるから行く。悲しい声を聞いて、笑顔を取り戻すきっかけになりたいから行く。「何しに行くの？」と問う人達に私は現地の姿を伝えていかなければならない。私たちが行くことを受け入れてくれてる寄磯の人達には本当に感謝。片づけをしても「早く飲みたいから早く片付けて部屋に来いよ。」と声をかけてくれる。本当に嬉しい。顔が見えないと今回はあの人とは？と聞かれる。みんなそれぞれ現地の人達と繋がってきている。仮設にいたほうが家族が近いから過ごし易いというお母さんもいた。仮設

Ⅱ 不自由な暮らしという考えは必ずイコールではないんだと教えられた。



寄磯浜での炊き出し

福島の本松眞行寺でも放射能測

定器や青空市場などを開いて少しでも子供たちを守ろうとしている。隣接する幼稚園に子供を通わせているお母さんたちが結成した「ハハレンジャー」によって青空市場は支えられている。佐々木るりさんの強い味方だ。放射能による同じ悩みを抱えているハハレンジャーの話もとても考えさせられる。「原発の事故は終息しました。」と政府は発表したが、「何をもってそんなことが言えるのか。何も終わってないし、安心なんてまだまだ出来ない。」と涙を浮かべながら話してくれた。これからも物資を福島に届け続け、サポートしていかなくてはいけない。安心して福島のお食べ物を食べられるようになるその日に向けて。



眞行寺青空市場

キッズふくしまスプリングキャンプリンたかだー2013ー

三月二十五日(月)から三十日(土)にかけて五泊六日の日程で、福島の小学二年生から中学二年生までの子どもたち総勢四十名を迎え、「キッズふくしま スプリングキャンプリンたかだー2013」が開催された。

四回目の開催となる今回は、ホームステイの日程を一日多くとった日程となった。日程が長くなった理由について、当初からの目的であった被ばく量の軽減のための保養であるが、同時に一日増やすことで日程に余裕を持たせ、保養を通して交流を深めていく狙いがあった。

キッズ(子どもたち)は、前半二泊を、今まで通り池の平青少年センターで、雪像づくりや雪上大運動会、お念珠づくりなどをして過ごし、後半三泊を教区内の計十一カ寺のお寺をホームステイ先にして、それぞれの時間を過ごした。

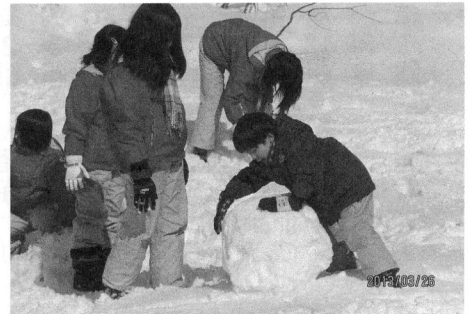
今回、ホームステイ先となったある寺院の住職は、寺での生活を子どもたちが楽しんでくれた様子であることに安堵する半面、厳しい現実を知らされたという。寺院を子どもたちと散歩したとき、土手にあったフキノトウを見つけて喜んでる子ども

もたちに「君たちの地域では食べないの?」と尋ねたところ、「放射能の問題があるから食べられない。」と答えたという。住職は、放射能の問題が切っても切り離せない日常になっていると語っていた。

事故から二年が経過し、かの原発禍が都合の悪いことのように忘却されようしている現在、子どもたちによつて、もはや日常化している原発禍の存在を教えられはしないだろうか。

今回、上越教育大学から三名のサポートスタッフの参加があった。前述のような問題も踏まえれば、今後、宗門を超えた広がりをもって、「キッズふくしま」の継続的な活動が期待される場所である。

(編集委員 藤島)



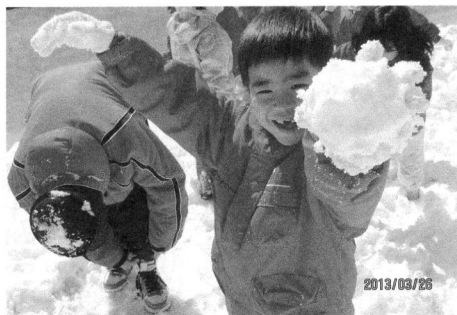
雪像づくり



みんなでヨガ



血まわし



2013/03/25



2013/03/26



2013/03/27

お寺のまど
作・絵 トライメイシ

3月、まじ雪深い
池の平青少年センター
子ども報恩講が
キッズふくしまスプリングキャン

にぎやかな声が
とび交いました。

私は、長い冬と白い雪と
大人たちの笑顔と
育ちました。

自分はどこから来たのか
忘れは いけません。

※今号より、トライメイシさんのマンガの連載が始まります。

教務所からのお知らせ

完納御礼

二〇一二年度宗派経常費(相続講金・同朋会員志)を御進納いただき誠にありがとうございます。

ここに、完納いただきました御寺院名を御披露し、御礼にかえさせていただきます。

- 第2組 恩敬寺 陽嚴寺
第3組 明了寺 禮信寺 本廣寺 淨福寺
第4組 淨念寺
西勝寺 慈圓寺 養性寺 當正寺
隨念寺 持專寺 淨善寺 敬音寺
願淨寺
第5組 西榮寺 林覺寺 覺真寺 忍西寺
安證寺
第6組 常敬寺 明善寺 本淨寺 長圓寺
最賢寺
第7組 妙行寺 極生寺 聞稱寺 康源寺
速念寺 宗顯寺 淨善寺 本覺寺
第8組 明岸寺 常光寺 本覺坊 源長寺

- 臨行寺
第11組 圓重寺 寶惠寺 添景寺 專敬寺
真養寺
第12組 專德寺 善德寺 光善寺 教念寺
西忍寺 性德寺 敬泉寺 德生寺
敬德寺
第13組 本敬寺 榮恩寺 福淨寺 了蓮寺
正行寺 本善寺 啓明寺 願念寺
(二〇一二年十月一日)
(二〇一三年一月二十日)
以上 六十一カ寺

- おくやみ申しあげます
ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。
第2組 西福寺前坊守 渡辺マサヨ
第11組 光圓寺前住職 竹内 好淳
第11組 照源寺前住職 村松 亮照
第12組 延慶寺住職 朝川 芳明
第13組 本敬寺前坊守 山崎 富子
●おめでとうございます
◎住職任命
第5組 西榮寺 加茂 悦子
第8組 善巧寺 森 恵成
◎教師補任
第1組 清雲寺 渡邊 顕哲
第1組 正覺寺 吉原 知夫
第2組 大蓮寺 佐藤 淳也
第5組 聽信寺 居多 啓
第5組 林正寺 古海 景雲
第7組 西谷寺 親跡 宗徳
第7組 淨善寺 関 隆徳
第8組 圓性寺 林 康一朗
第11組 本教寺 喜多山善秀
第13組 信光寺 竹内 統
◎得度
第1組 光照寺 梅澤 未有

真冬から春へ、大きく移り変わりゆく越後の季節の中で、多くの行事が行われました。特に雪と関係が深い高田教区では「スキー」「スノーボード」「ソリ」等でのイベントが、妙高高原にある「池の平青少年センター」にて行われました。私も「スキー教室」「児童冬の集い」に参加させていただきました。その中で遠方からの参加者や、幼い子どもたち、ご高齢の方まで雪を求めてセンターに集われ、それぞれの道具と思いで雪を楽しんでおられました。深い新雪の中で転んでも、一日中滑って疲れていても笑顔の方。ソリをうつ伏せで乗り、雪の降る中、雪まみれになつて遊んでいる笑顔の子どもたち。豪雪地帯に住む私達には、雪が降ると「除雪、排雪」という大きな仕事が出てきます。この仕事に大きな労力と時間等をかけねばなりません。ですが、この冬を楽しんでいる、すばらしい笑顔があります。
また、当教区には「池の平青少年センター」という集える場所があります。まだいらした事のない方、どうぞ足を運んでみてはいかがですか。(菴澤)